

String
Fiction Series

10

生きがい



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

生きがい

山中與隆

目次

生きがい

1

編者あとがき

59

生きがい

山中與隆

1

私は後悔した。

「今回は、僕がレッスンしている生徒さんたちには
ぜひ舞台に乗ってほしい」と先生に言われたとき、

「もちろんです」

と、二つ返事で約束したことをだ。

私は、長年先生のレッスンを受けていたが、あることが切っ掛けでいまは受けていない。それでもいろいろな場面で先生とは交流があり、主に大人の生徒を教えておられる先生の門下生の発表会には、レッスンをやめて何年にもなる私は今でも参加している、そこで妻や友達のピアニストと一緒にピアノト

リオを演奏させてもらっている。

後悔したと言うのは、あるアマチュアオーケストラの定期演奏会に出る約束をしたことだ。私はそのオーケストラの正式メンバーではないが、七年前から毎年のように参加している。それでも団員になっていないのは、遠いからである。練習には車で三時間かけて出かけているのだ。歳のせいもあって、その往復だけでも疲れを感じ始めて、昨年はパスした。

そのオーケストラの今年の演奏会で、先生はラロのチェロ協奏曲を独奏される。だから、永年先生の指導を受けてきた私としては、先生がソロを弾かれる演奏会で同じ舞台に乗ることができるのは、とても光栄なことなのだ。

ただ、私にとって大きな問題があった。それはこの演奏会のプログラムのもう一曲がマーラーの交響曲第五番だと言うことである。ラロのチェロ協奏曲

は以前別の演奏会で、ソリストも別の人だが弾いたことがあるので特に問題はない。ところがマーラーの五番はアマチュアにとって大変難しいことで知られている。これを探り上げるアマチュアオーケストラはあるにはあるが、そのオーケストラの規模やレベルが問われるのでそう多くはない。今回のオーケストラは規模が小さい上に、レベルも決して高いとは言えない。ただ、すでに定期演奏会は十六回目を

数えていて、いつもメンバーの意欲に溢れる演奏で聞きに来た人たちの評判は悪くない。それにしてもマーラーの五番は荷が勝ちすぎていると言わざるを得ない、と私は思っている。さらに大きな問題は私自身が、いくらがんばって練習しても弾けるようにはならないだろうという不安を強く持っていることである。

アマチュアオーケストラの多くは、充分に弾けな

い弦楽器のメンバーを抱えてやっている。彼らは、自分の技量で何とかなるところだけを弾いて、あとはいかににも弾いているような格好だけで誤魔化すというやり方で、それなりにオーケストラライフを楽しんでいる。私も、マーラーの五番でなくても、これまでにどんな曲の場合でも弾けない部分は多かれ少なかれあった。しかし、それも程度の問題で、非常に多くの部分を弾いている格好だけで過ごすこ

とは、私のプライドが許さないし、そもそも楽しくもない。

「マーラーの五番がねえ」

私は、先生にお会いしたときに、ため息混じりで漏らした。

「たしかに、あのオーケストラであれをするのは無理がある。どうしてもマーラーがしたいのだったら、せめて『巨人』（第一番）なら多少はましかも知れな

いのだがね」

と、先生は私のため息に理解を示して下さった。しかし、

「そんなこと言っても決まっちゃったものは仕方がない。まあ、頑張るしかないね」。

『頑張るしかない』と言われても、七十四歳になる私にとってこれは心身ともに大きな負担を抱え込むことになるのである。新たな難しい譜面を弾きこな

すことは、若い人に比べるとはるかに時間がかかる。まったく進捗がないということはないかも知れないが、私には殆ど成果を期待できないと思えるのである。

「はあー」

私は、曖昧な返事しか出来なかつた。

そう言っている間にも、本番のおよそ半年前から

オーケストラの練習は始まった。私も楽譜を受け取り、次のオーケストラ練習に備えて個人練習を始めた。ラロも、弾いたことがあると言つてもだいぶ以前のことであったのでスラスラというわけにはいかなく、かつた。しかしこれはこれから練習すれば何とかなるといふ感触が得られた。ところがマーラーの方は、初めて見る楽譜ということもあるが、そのせいだけではなく、『これはちよつと自分の手には負えない』

という直感があつた。それでも初めからゆっくりと音を確かめながら弾いた。演奏会の本番までには半年ある。私はその期間にこれを何とか流れについていける程度には持つていきたいものだと考えた。

私はオーケストラ練習の日まで、一日中マーラーの楽譜に取り付いていた。実際のテンポがどれくらいかは、CDなどで知っている。だが私は、テンポを四倍くらいに落として一音一音さらっていった。

それでも上手くいかないところが非常にたくさんある。と言うより上手くいかないところばかりだ。そもそもこれは一時間以上の長大な曲である。私が乗り越えなければならぬ分量は、気が遠くなるくらい膨大である。

最初のオーケストラ練習で指揮者は、ほぼ実際に演奏されるのに近いテンポで棒を振った。私はほと

んどの部分が弾けなかった。この日は、マーラーどころかラロも弾けないところがあつたが、何処をやっているのかわからなくなることはなかつた。ところがマーラーの方は多くの場所で、演奏している場所がわからなくなつた。いわゆる『迷子になる』というやつである。それは私だけではなかつたので、指揮者はみんなが迷子になつたようなところでは、一旦止めてやり直したが、それでも私はすぐに、ま

た迷子になつてしまふのだつた。

新しい曲のはじめてのオーケストラ練習で弾けないところがいろいろあるのは珍しいことではない。それでもたいていの場合私は、『これは駄目だ』と思つたりはしない。しかし同じ弾けない状態でも、今回に限っては、今後練習を重ねて弾けるようになる感触がまったく持てないのである。

私は落ち込んだ気持ちを引きずつて練習場を後に

した。この日の練習では、他の人たちも弾けていなかったようだが、私にとってそれは関係ないことである。私がアマチュアとして音楽活動しているのは、自分自身が優れた音楽作品に直接接触れて、CDやプロの演奏家たちの素晴らしい演奏を聞くだけでは得られない、体の中から湧きあがってくるような感動を体験するためである。それはプロのように完璧に弾けなくても十分に体験できると言うことをこれま

での永い経験で知っている。もちろんそのためには少しでも良く弾くことが大事で、練習することによって上手く弾ければそれだけ得られる感動も大きい。だからいくら練習しても箸にも棒にもかからないような難曲は、それがどんな名曲であつても、演奏することによつて感動を得ることはできない。そのような曲は諦めるしかない。私はマーラーの五番は、諦めなくてはならない部類の曲だと思ふ。

それでも私は次のオーケストラ練習に備えて一ミ
リずつしか進まないような練習を続けた。そのよう
な練習を二箇月続けた段階になつても、私にとつて
その曲が諦めるべき部類の曲であることは変わらな
かつた。

実は、この演奏会には私の妻も、第二バイオリン
として参加することになっている。妻にとつてもマ
ーラーの難しさは私と同じだつたようだ。そしてオ

ーケストラ練習では何も弾けなかつたと言っている。妻は、来る日も来る日も遅々として進まない練習を実に根気よく続けている。その練習は傍で聞いている者には非音楽的な不快なものである。もちろん私の練習も、傍で聞く者には苦痛しか与えないのは同じである。

私と妻は相談して、オーケストラ練習に行くのを二箇月休んで、その間ひたすら個人練習を重ねて、

多少でもついていけるようにしてからオーケストラ練習に出ることにした。その間に、二人とも参加しているいくつかのアンサンブルの練習などもあったが、それらの練習はそこそこにして、もっぱらラロとマーラーの練習をした。ラロは直ぐに目鼻がついてきたので、もっぱらマーラーに集中してこの期間を過ごした。

オーケストラ練習に出るのを休んで二箇月経った

ころ、私たちは少しだけマーラーの音符に慣れてきた。それにしても目まぐるしく調合が変わるマーラーの譜面には悩まされる。モーツァルトやベートーヴェンはもとより、もつと前の時代のバッハでもひとつの楽章の中で転調することはある。しかし古い時代の音楽は転調があっても比較的短い区間の場合が多く、そのたびにいちいち調合を変えたりしない。時代が下がるにしたがって転調があると調合を変え

てしまふという書き方が使われてくる。マーラーの五番では第一楽章で五回、第二楽章では十二回、第三楽章スケルツォでは十三回、第四楽章アダージェットにも三回、そして第五楽章ロンドには何と二十回といった具合である。専門家や上手いアマチュアにとつては何でもない、と言うよりむしろその方が読みやすいと思う人もいるだろう。だが私たちのような下手な、しかも年寄りのアマチュアにとつては、

これほど煩わしいことはない。要するにフラットでもシャープでも四つ以上つくような調合は苦手なのだ。もちろん調合を変えずに、それを全部臨時記号で書かれたらもつと読み辛いかもしれない。

CDでマーラーの五番を繰り返して聞いて、曲の流れを勉強しようとした。アダージェットだけはもともと大好きな音楽だったが、それ以外の楽章はまともに聞いたことがなかった。だがいまは好き嫌い

を言っている場合ではない。スコアやパート譜を見ながら繰り返し聞いた。アダージエツト以外の四つの楽章は、途中何箇所も何処をやっているのかわからなくなる。しかし、諦めるものではない。いくつかのパートが複雑に絡んでいるところや、大きくテンポが変わるところも、一度聞き取れるようになる。不思議に何処をやっているかくらいは迷わなくなってくるものだ。

比較的ゆっくりのところは、実際の演奏では指揮者もいるので、テンポの変化がわかって、弾くべき音を読めるようにしておけば何とかなるかも知れない。

しかし、テンポの速いところが連続する最後の第五楽章は、その速さに私の哀れな指も頭もついていけないで、途中で譜面から振り落とされてしまう。CDを聞きながら楽譜を追っているだけでこれだけか

ら、自分で弾くとなると、とてもじゃないが埒が明
く筈がない。第五楽章は私にとっては速さが問題だ
が、第二楽章や第三楽章では速さだけではない。あ
る程度の速さで弾こうとすると、リズムでおたおた
してしまつてついていけなくなる。それが長く続く
と、目も頭も混乱してパニックになつてしまう。そ
れは老人がリズム運動のてきぱきした動きに置いて
きぼりにされるのと同じなのである。

根をつめてこんな練習をしていると、それも仕上がりとは程遠いレベルでの練習が長く続くと疲れが激しい。バイオリズムが下がっている日には、

「こんなことはやめてしまいたい」と思い始める。

引き受けたことを後悔し、その練習から解放されたいと思うことは、私の長い演奏人生で一度や二度ではなかった。しかしこれまではたいていの場合そ

のよゝなブルーの気分は、個人練習によつてオーケストラ練習で回を追つて弾けるところが増えていくと、いつの間にか消えていく。ところが今度だけは、チェロを弾くことをやめてしまおうかとまで思い始めてしまったのだ。遅かれ早かれチェロを弾くことから足を洗うときはやつて来る。もう七四歳。遅かれではなく、そのときは直ぐそこまで来ているかも知れない。

ドタキヤンはアマチュアの世界でも最低のマナー違反である。しかし実際には避けられない事情などでドタキヤンを実行する者はいる。それがパートに一人か二人だけの管楽器奏者だったりすると、影響は甚大であり大きな問題になる。本人は非難され二度と演奏に参加を許されない。それに比べると弦楽器の場合は一パートに六人とか八人いるので、トツプでもない限り一人抜けても演奏全体に大きな影響

を及ぼすことはない。しかも今度の場合のように、大して弾けもせず戦力になりそうもない私の場合、なおさらいてもいなくても関係ないと思われるだろう。

そしていま私はチエロそのものをやめたいとまで思っている。ドタキャンそのものが褒められることはないが、それほど大きな悩みだったら同情を持って見られるだろう。

ところが、私がキャンセルしたら自分もキャンセルすると妻が言い出した。高齢の私だけでなく、私より五歳も若い妻までもが一緒にキャンセルしたのでは、あまりにもみつともない。これまで何回も参加してさまざま良い曲を弾かせてもらってきたこのオーケストラに対して失礼すぎる。私は、妻にはキャンセルしないで欲しいと言った。妻は、練習に行く足も無いし、自分もほとんど弾けないに決まっ

ているから降りると言つて聞かない。二人はいつも私の運転する車で、朝六時に家を出て九時に始まる練習に行つてゐる。妻は免許を持つていない。

私はそれから三日間チェロケースの蓋を開けなかつた。考えれば考えるほど憂鬱さが胸の中に広がつて、チェロだけでなく何をやる気も出てこなくなつてしまつていた。私は、よく耳にする鬱病というのがこれなのかと思つた。

妻は私ほどではないらしく、私がやめるのなら自分もやめたいとは言っているが一応練習は時間を惜しむようにして休まず続けている。だから気分転換に一日ドライブにでも出かけようと誘うのも気が引ける。

私は、することもないので散歩に出かけることにした。私たちは健康のために近所を何周かして多いときには七キロくらい歩いている。歩くことは妻よ

りも私の方が熱心で、妻が面倒くさがって行かないときには、私一人で出かける。

この日も私は一人で歩いた。夕方まで雲一つない好天で、五月の風が気持ち良い。私は、多少もやもやしたものが減ったような気がした。だが、家に帰ったときまだ妻がマーラーの音を探り探り練習しているのが聞えてきて、いっぺんに出かける前の気分に戻ってしまった。

夕食のとき、

「やっぱりキャンセルせずに行きましようよ」
と妻が言った。

「どうして？」

「みんなに悪いと言うこともあるけど、自分自身のためにもよくないと思う。私たち、あと何年弾けるかわからないのだから、ごちやごちや考えないでとにかく弾ける間は弾きましようよ。急がなくてもや

めなきやならんときはいずれ来るわ」

「そのやめるときが、私にはいま来たのかも知れな
いんだ」

妻は、黙ってしまつた。私が続けた。

「やめるときが、どういふ風に来るのかわからんよ
ね。病気やなんかで弾けなくなるかも知れんが、こ
んな風に突然モチベーションが下がつてしまつて、
どうしても持ち直せないでやめることもあるんじや

ないかね」

会話は途切れた。

しばらくして妻が言った。

「私、本番のようなテンポでは絶対に弾けるようにならないと思っっているけど、練習してるときひどくゆっくりにしてでも何とか弾けるようになる」と嬉し
いものよ」

「それは私も無いことはない。でも本番のテンポと

あまりにもかけ離れ過ぎてているんだよね」

「この前、気分転換に他の楽譜を出して弾いてみたら、明らかに以前弾いたときよりも音を取りやすくなってるみたいなの。マーラーの練習してると賽の河原のように思えてくるけど、やっぱりゼロでもないし、もちろんマイナスなんかじゃないと思ったよ」

「そうか、あの曲を仕上げるとか、オーケストラの戦力になるためとか考えずに、ただコツコツと壁に

立ち向かうのが私らがすることと割り切れればいいと
いうことか」

「そうよ。そう思えば気が楽になるし、テンポが上
がらなくても気にしないで、できるテンポで確実に
弾くことを楽しめばいいのよ」

「そう言えば思い出したけど、先生のレッスンをやめ
たの、ポップーのエチュードの難しさに閉口したた
めだったよね。あの時どう言って断ったのか忘れた

けど、なんか理由をつけて突然やめたんだ。もしやめずにがんばってたら、マラーでもいまほど苦労しなかったかも知れないね」

「そのときあなたは、いまより五歳若かったわけだしね」

「そうか、いまのあんたくらいと言うことか。マラーはポツパーのエチュードで苦労して音を探したのにちよつと似たところがあるな」

「速くは弾けないけど、フラット五つやシャープ五つの調のところでも、マーラーのこの曲はまだ調性があるから、一旦メロディを覚えれば音は判るようになるのよ。それに、いままで本気で聞いたことなかったし、初めのうちは訳のわからん騒々しい音楽だと思っていたけど、何回も聞いていると案外良い曲だと言うことがわかってきたわ」

「そうは言っても、やっぱりベートーヴェンなんか

と違つて音もリズムも覚えにくいところが多いよ」

こうして妻と話しているうちに私は少しずつ心に立ち込めていた霧が薄くなつていくような気がしていた。確かに何時間取り組んでもたった八小節の音やリズムが身につかないことはあるが、ある程度弾けるようになったときの達成感はある。そのときに「こんなテンポで弾けても何にもならない」と考へない方がいいのだ。また、全ての場所がそん

なのではなく一時間くらいで一ページ進むところもあるではないか。

ただ、これで直ぐに私がやる気を取り戻したわけではない。そのように苦勞して苦勞してゆっくりなら弾けるようになっても、二、三日他の箇所に取り組んでからまたそこに戻ってきたら、ほとんど忘れてる。もう一度はじめからやり直した。こんなことでは弾けるつもりになっているラロの方も忘れて

しましう恐れがある。だからマーラーだけでなく、このさいいつそのことチエロをやめてすつきりしたくなつてしまふのだ。

チエロをやめてしまつたら、

「上手くならなければ」

と言ふここ何十年も私の身体から抜けたことがない麻薬から解放されてどんなにすつきりすることだらう。

でもそれで毎日の生活は楽しいだろうか。好きな山に登ることは膝を傷めていて無理だ。中学から大
学までやっていたテニスも興味はあるが、同じ理由
で無理だろう。年金生活者の私には、テニスクラブ
の会費も負担になる。気ままに旅行して回る金もな
い。燃えるような恋に憧れても、萎びた老いぼれを
相手にする女性などいない。絵を描くとか写真を始
めるとか小説を書くとか、私は考えてみたが、どれ

も一から始めることになる。始めることは可能だろうが、生きがいになるほどのものになるだろうか。

それに比べると、チェロは下手ではあっても、一応アマチュア仲間に混じって楽しむことが出来る。マーラーはまるで弾けないが、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンのカルテットだったら自分たちで楽しむ程度には弾けている。もちろんそれらにも弾けない箇所はあるが、練習すればある程度は弾

けるようになる。チエロをやめて自分の人生は満たされるのか。続けるのも苦しいが、やめるのも面白くない。

私は、もう一つ気が付いたことがある。それは今回妻の取っている態度である。これまでアマチュアも参加できる室内楽セミナーの公開レッスンに、私と一緒に申し込もうと言っても、妻は頑なに否定し

ていた。仕方なく私一人で参加したことも一度ならずある。

その妻が今回に限って、何故かそのような消極的な姿勢を見せない。

「難しい」

「嫌になる」

「キャンセルしちゃおうか」

などと私に話を合わせることはあつたが、実際には

遅々として進まない困難な練習をサボろうとしないのだ。チエロを弾くことをやめてしまおうかと思う私の重症状態とはかなりの温度差がある。

私は、

「いいかげんにしてくれ」

と言いたくなるような聞くに堪えない妻の練習の中に、明らかに変化の兆しがあることに気が付いた。私は、いやいや練習している自分に比べて妻は確か

に前に進んでいる。それで本番までに弾けるようになるかは疑問だが、妻が言っているようにこの取り組みで彼女の技量がこれまで取り組んだことのない新しい領域に踏み込みつつある。その微かな手ごたえを実感できるために、妻は黙々と練習を続けているようだ。

そう思った私は、自分の中にも同じものがあるかも知れないと思い始めた。私は久しぶりに楽器を開

いた。いざマーラーの譜面に向かい合おうと、

「またこれか」

と感じたが、同時に

「どんなに進みが鈍くても続けてみよう」

という気持ちも心の隅の方にはあるような気がする。

「今日一日掛かって、一小節か二小節でも構わないからここだけはものにしよう」

と思つて私は練習を始めた。気持ちが定まると、譜

面を見たときの嫌な感じは無くなってきた。進みが速くなったわけではないが、出来ないことに挑戦する喜びのような感情が私の中に湧いてきている。

こうして私は妻のおかげで、登山道から外れそうになった山の中で、ふたたび進むべき道を見つけた。私たちが本番でどの程度弾けるかはわからないが、とにかく止りかけていた歯車がゆっくりと動き出し

た。

私は、七十四歳の上手くないアマチュアのチェロ弾きという自分の立場を忘れてしまったわけではない。若者や子供には無限とも言える時間がある。教えられたことを吸収する速さがある。一旦覚えたことを維持する記憶力がある。集中できる時間も成長とともに長くなる。好奇心も旺盛である。だから皆がみなとは言わないが一流の演奏家への道さえも開

かれている。ところが老人である私は、それらのすべてが真逆なのだ。二つでできるようになっても次の日には一つを忘れ、二日目にはもう一つも忘れる。いや、一パーセントくらいは残るかもしれない。仮に少しだけ進歩したとしても、目に見えないほどの進歩が何になるのか。しかし、それらのことを充分にわかった上で私は、毎日の練習に喜びを見出し始めているような気がするのだ。

本番の日は、私たちの苦労とは関係なしにやってきた。私と妻はその前日まで、コツコツと我慢の練習を続けた。そして本番の演奏で、私たちはやはり予想通り弾けなかった。正確に言うると弾けるところもそれなりにあつたが、速いところや音取りの難しいところはほとんど上手くいかなかつた。

この演奏会では、前半で協奏曲の独奏をした先生が、後半のマーラーでもチェロパートのトップとし

て弾かれた。これはソリストの負担から考えて異例のことだが、あまりの難曲ということ、先生はアマチュアのみんなの助太刀をせざるを得なかったのである。

演奏が終わったとき、先生はパートのメンバーをねぎらったが、先生のすぐ後ろの席で弾いていた私を振り返って、

「よくさらっていたじゃないか」

と声をかけて下さった。私は多くの箇所でみんなの足を引っ張ったと思っていたので、先生は単に年寄りやをねぎらってくれただけかも知れないが、少しくらいは苦労のあとが見えたのかも知れないと私は思うことにした。

打上げが終わって帰宅するとき、私はこの話を妻にした。妻も周りで弾いていたバイオリンパートの人たちに、

「すごいじゃない」
と言われたそうだ。

(了)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたいたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる轉身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 10

生きがい

2022年11月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル：弦楽器グラデーション

作者：t-dunさん

イラストのID: 2610321

・タイトル：花のフレーム2(黒)

作者：猫エンジンさん

イラストのID: 1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル：譜面台

素材のID: 105365

・タイトル：譜面台

素材のID: 105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル：チェロ

作者：r*****mさん

写真のID: 3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
